

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270102132		
法人名	有限会社長建寄り逢い長崎		
事業所名	グループホーム 坂の上の紫陽花		
所在地	長崎市本河内2丁目14-15		
自己評価作成日	平成27年12月22日	評価結果市町村受理日	平成28年5月2日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/42/">http://www.kaigokensaku.jp/42/</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構		
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内		
訪問調査日	平成28年2月8日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

長崎で民間法人としては最初のGH開設平成12年から今年で15年経過した。昨年より再度スタッフに認知症の最新の情報と今からどう対処していくかを、毎日の全体ミーティング伝達で再教育することにした。書き入れ書類も、専門用語から、出来るだけ家族にも分かりやすく書き入れる事の指導をする様にと改めた。更に深く掘り進める様に今後もして行きたい。介護の基本的目標はスタッフが入居者と触れ合いをしているのか?であり、いかに信頼が重要な事。東山手の火災で長崎市では月一回と条例化された火災避難訓練を消防署への火災通報ボタンを押す訓練を取り入れ「月2回夜間と日中を実行し、更に入居者が緊急事態の際に救急車を要請する際に、スタッフがパニックにならない為の救急車要請訓練を実行している。入居者には開設以来15年入居され住まわれている方がおられ、終焉と言われて最期はホームでという本人の以前からの希望や家族の希望もあり病院からホームに移動され寝たきりの状態になられていたがホームで長年の介護スタッフとの触れ合いで不死身の様に生き返られて元気になられ今はホーム内を歩いて過ごす様な状態になった。去年から今年の出来事であります。来訪する幼児・子供との触れ合いの機会を設けた事で、入居者が喜ばれた。

事業所をスタートさせ今年で16年目を迎える。代表の地元であり、先代からの地域との関わりは深く、高齢者に関する相談事が多い。行政からは、身寄りがない利用者の受入れに理解がある事業所として認知されており、相談を受ける関係である。代表者は、常にアンテナを張り、介護技術に繋がる情報をいち早くキャッチして、職員へフィードバックしている。利用者の生活歴を把握し、行事での冒険挨拶をお願いしたり、職員と一緒に調理することで、本人に居場所と役割を提供し、生きる喜びを取り戻す支援を行っている。また、Dr. ネットによる24時間の医療連携や災害訓練等、利用者の命に関わることへの早急な取組みで、利用者主体の事業所であることが窺える。身寄りなき利用者の看取り後も、葬儀社、住職の協力を得て、葬儀一切を取り行い、事業所会議室に仏壇を構えて納め、毎月住職による供養を欠かさない。たとえ高齢になろうとも障害があっても、人、皆平等の精神の基、営みを続け、利用者が毎日、楽しく過ごせるように、理念の具現化に取り組んでいる事業所である。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者や職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	尊厳についての言葉使いにおいて、「ユマニチュード」という、介護に関する言葉が、最近盛んに言われています。その人の「人間らしさ」を、尊厳続ける状況こそが、「ユマニチュード」の状態であると定義したのがその意味です。 「さまざまな機能が低下して、他者に依存しなければならぬ状況になったとしても、最期の日(ひ)まで、尊厳をもって暮らし、その生涯(しょうがい)を通して「人間らしい」存在であり続けることを支えるために、介護ケアを行う、人々が、ケアの対象者に「あなたのことを、私は大切に思っています」と、いう、メッセージを常に発信する」つまり、その人の「人間らしさ」を、尊厳続ける状況こそが、我々の理念の原点です。「見る」「話す」「触れる」「立つ」に関しての技法「人とは何か」「ケアをする人とは何か」など、介護者の関わり方を、実践技術を再度自己満足しないで、見直すことにしました。まだまだです。理念の再確認が必要と思います。	誰もが平等に生きる権利があることを基本に作った理念である。北海道にある事業所とともに毎日代表が理念に託した思いを伝えている。代表は現状に留まらず、「ユマニチュード」の研修をケアマネージャーと受講し、更に良い介護を目指している。利用者のために、現状に満足せず、学ぶ機会を大切にしていることが確認できる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ホームが総括施設長江口孝則の自宅であり、親の時代からの地域への貢献の歴史があり、確実に地域の活動への参加や地元の人々との交流に努めている。地域の一員として地元の人と交流している。今後も介護業務で地域へ出来ることに取り組んでいる。	代表の地元であり、先代から地域との関わりは深く、住民が相談に寄ったり、車椅子を借りて訪れている。地域の災害訓練に利用者も一緒に参加している。代表の自宅に成った柿を配ったり、管理者の実家で栽培している野菜や果物を事業所前に無人販売所を設け販売しており、近隣の高齢者の買い物への助けとなっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域のホームとして、江口総括施設長は町内で、過去自治会役員に就き、地域貢献をおこなう。いろいろな地元での行事参加により、また認知症のみでなく、高齢者への対応や身体障害者の対応についても相談が、頻繁に持ち込まれる。今後も地域の方々が気軽に立ち寄れる雰囲気作り心掛けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期的な地域運営推進会議を確実に実施し、町内会役員、民生委員、利用者、家族、法人代表者及び管理者スタッフで構成し、会議は確実に2ヶ月に1回、年6回を実施している。入居者の身体的、精神的な状態を、写真で示して、報告など詳しく写真を使い説明している。また参加者委員の意見を、常に謙虚に聞き当ホームの介護サービス向上に役立たせている	2ヶ月に一度、規程のメンバーで開催している。メンバーには入居者もいる。事業所での行事や生活の様子を紙面にて配布し、わかりやすい工夫している。会議では消防署から注意事項の説明があったり、自治会長や民生委員から地域の状況について相談があるなど、有意義な時間となっている。	

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	2ヶ月に一回の定期的な運営推進会議に市担当者及び包括支援センター職員の方が参加されたり、何かあれば頻りに連携を充分にとりサービスの質の向上に努めている。講習会なども積極的に参加し、長崎市の包括支援職員や長崎市すこやか支援の職員とも、積極的に協力体制を築いている。	代表者は、年1回開催される地域包括主催の会議で、行政から依頼を受け「認知症について」の講師を務めている。また、身寄りがない利用者受入れに理解がある事業所として、行政から受入れ相談がある。他の担当課の利用者訪問もある。介護相談員が訪問し、利用者とは会話したり、ゲームを楽しむなど良好な関係を構築している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	開設以来、身体拘束の基準的な考え以前に家庭は鍵をしないと云う考えで当ホームは玄関などの施錠は禁止し、自由に気軽に立ち寄れることが出来るよう努めていたが、認知症家族への交通機関での事故の裁判で、介護者に全責任が問われ、賠償金支払いの判決が出た事により、玄関に施錠をしている事があれば身体拘束と問われても、ホームを維持管理経営する立場から見ると、「施錠しないホーム」を我々は理念としている事を180度の考えとしない事になった。「施錠しない」事が、「身体拘束をしている」といえるのか？疑問となっている。	事業所はセンサーマットも身体拘束にあたると考え、使用していない。職員は、全体ミーティングや昼のミーティングの際に、注意し合っている。玄関の施錠は、代表の考えを基に、職員の配置状況等を考慮しながら、現在は少しずつ開錠している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	平成24年1月26日に、長崎県関連の講習会に参加し、基本的考えを再度学ぶ。当然、尊厳を持って理解できる様に、いかなる虐待を見過ごさないよう、スタッフなどにも徹底した虐待防止の指導及び管理を実行している。入浴介助の際にも裸体で身体に虐待形跡が無いかのチェックを常に行なっている。高齢者への虐待など「絶対に見過ごしはしないという姿勢がホームの精神である。理念として「絶対はこのホームは、虐待は許さない。見過ごさない。見ぬふりをしない」		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持つべきだが、ホームとして長年に渡り実際に利用された結果は、この制度への理解は使用された側からはこの制度内容には疑問が残る。何故なら、この制度は管理者、対象者死亡時点で契約解除となる。人はいずれは死に向かうのだから、身寄りが無い、無縁の者へは、それ以降の儀式等も、ホームが行う事が、この制度を利用する者は、必然的にあるはずであるのに、あまりにも無責任な制度と思わざるを得ない。とてもこんな制度を入居者の日常生活自立支援事業や成年後見制度について利用している為に理解させようとは思わない。それらを活用できるよう支援しているか？。については、介護保険課に携わる者でも、疑問視をしているとの、発言も会議などである。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用料の改定時などは、事前に手紙などを郵送し家族等に説明している。不安や疑問点があれば、いつでも十分な説明を時間を掛けて行なう事も、家族等に説明している		

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	当ホームの利用者と家族からは、運営に関する意見が長年無いが、仮に意見が出た時点では、毎日のミーティングでも報告を全スタッフの前で隠さずに実行する事になっている。今後も利用者の状態変化時の連絡や健康面での相談を話し合い家族の意見なども運営に反映している常日頃において、管理者や施設長が家族の訪問時など日常の様子を報告を、日常的に行っている。必要以上に心配かけてはいけない事もあり、家族へは、日常の事を参考にし、家族に精神的負担を掛けない言葉で、分かり易く説明する事を心掛けている。	契約時に本人・家族に外部に相談窓口があることを伝えている。家族訪問時は要望を尋ね、遠方の家族には、利用者が寂しそうな時などに電話を取り次いでいる。聞き取った要望は、ミーティングを通して職員間で共有し要望に沿うよう検討している。利用者の要望を遠方の家族に伝え、居室加湿器を備えた事例がある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	この頃は、職員の提案や意見が少なくなって来ているが、毎日のミーティング会議の場や、勤務後にスタッフとの懇談会等を設けているような意見を和気あいあいの中で聞くことにより、提案があれば出来るだけ、取り入れる事になっている。	グループホームミーティングなどで代表や管理者に意見・提案を出せる機会が多い。炊飯器や掃除機を新調し、浴室には滑り止めシートを設置する等、職員意見を反映している。代表は便利で必要と判断して圧力鍋を購入し、自ら調理することもあり、調理担当職員の負担軽減を図っている。	
12		○就業環境の整備  代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努める事によって、ホームのレベルアップに努める様に「最善」の努力をする事になっているが、現時点で給料を見直しについて、国保から今年度に介護報酬が3%減額された事により、世間より10万円も低いと言われていた給料を見直しすることも出来ないのが現状で、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めているためには、現時点では無理と思われる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ホーム内でケアにおける、その者の能力と力量に応じた実務での優しい言葉での指導が必要である為に、介護に関する資料や講演会での新しい情報を毎日のミーティング伝達用紙に、書き入れて学ばせる事を常に行っている。例えば「ユマニチュード」の状態であると定義したのがその意味で。入居者が「さまざまな機能が低下して、他者に依存しなければならない状況になったとしても、最期の日(ひ)まで、尊厳をもって暮らし、その生涯(しょうがい)を通して「人間らしい」存在であり続けることを支えるために、介護・ケアを行う、スタッフを育てる意味でも必要とする為に、現場での体験を参考に学ばせ機会を設けている。		

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表者として同業者との付き合い交流はあるが、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、現在は全く無い。ホームで勤務する者の余裕が無い為に、このような時間が設けられない事は残念である。不足していると感じている。見学については開設当時よりホームのいつでも受け入れる体制であり他の業者からの入口の扉は開けている。ネットワークづくり等、近年は講習会等の機会と同業者と情報交換をしているのが現状である。現在は医療機関などと情報交換しケアサービスの質の向上に取り組んでいる。		
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	管理者やスタッフが、日頃の介護等で信頼を得て、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。利用者の話をじっくり聴き、そばに付き添い入居者との信頼関係が築くよう努力している。当ホームの入居者は、自分の意志をはっきりと示す為に、ホーム内の飾り付けや入居者同士への、気が付かない事をスタッフにも助言する事などもある。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	代表者の考え方としての指導は、サービスを導入する段階で、最初に「家族がどんなことで困っているのか？」を聞く事において、まだ不満足を感じる様に思っている。今後も出来る限り初心に戻り、謙虚な思いを持つことを、管理者と協議している。また「利用料など金銭面など」に関しても、出来る限り要望に答えるよう支援している。当ホームは、家族の居ない、無縁の方が入居されているが、家族と同じ思いで、また人としての最期を安心して迎えられる事への、事業所として出来る限りの努力を行っている。ホームには長年在籍されている入居者がいる。その為に入居者に対しては、家族とは家族同然の付き合いが続いている。		

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援  サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	まず、何が一番必要としているのか？を見極め、安心した生活を送れるように、介護しながら観察し入居者の身体状況と「出来る事。出来ない事」とまた、サービス導入時期に際しての、精神状態を見定め、支援している。が、他のサービス利用も含めた対応に努める事も、必要であるが現在無いのが現状である		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、本人を介護される一方の立場におかずについて、ホームの「理念」にあげている通りであり、利用者の尊厳を尊重しながら支えあう、信頼できる家族同様の関係を築いている。介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係、それがグループホーム本質である。我々の「自己満足かも知れないと、自問自答しながら、うぬぼれる事なく」を、最善を尽くす事が、今後の我々の課題と思っている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ホームの理念は「家族の関係を常に基本として、職員にも本人と家族の絆を大切にしながら支える」考えは築いている。また親類や家族がいても見放されて居る者、無縁の者など、家族の支援はいろんな例が有るが、共に支えて行き事については、スタッフは常に「代理家族の思い、家庭という立場」で、出来る限りの努力を行っている。それは謙虚で「押し付けで無い」考えで努力する。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	関係の扉の扉を閉じる事なく、支援して行く事を努力している。いつ何時でも事前の予約無くとも訪問されて来た場合などホームでは受け入れている。本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、最大限の支援に努めている。	兄弟、友人、近隣住民の訪問があり、居室でお茶を飲みながら訪問者と歓談し、時には職員も話に加わることがある。かかりつけの医療機関や美容室、近隣公園の散歩等、職員同行で馴染みの場所との関係継続を支援している。家族同行で行きつけの店で外食する利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	身寄りが無い方が大勢入居されている関係で、入居者同士で助け合う心は、認知症であろうとも、忘れずに続いている。ホーム内で、日中車椅子に座って居る入居者同士が、手を握っている姿、握られている方も安心して笑顔を見て、胸を打たれる事もある。またホーム内で知り合った人同士でも、昔からの親友である様ないたわり方を見ると「一人一人が孤独を味う事が無い」ホームが理想であり、スタッフの入居者への思いやりが、入居者にも伝わっている様な気がしている。その為の支援は続けている		

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後は、当ホームとは関係なく、途切れる事が多い為に、現実には行っていない。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや意向を把握し、外出や趣味への支援などを本人本位に検討する様に努めている。ただ理想と現実には難しい事が多い。室内への持ち込み家具等で希望を把握している事もある。	急な外出や前もっての外出は、代表に許可を得て支援している。また、美容室や買物の買い出しなど利用者の希望に沿って外出を支援している。日々、支援中や食事後、入浴中に思い・意向を聴取しているが、フェイスシートに追加記述が行われていない。	思いや意向、或いは幼少期の話など、掘り下げて傾聴し、家族が知りえない事柄もフェイスシートに追記して、利用者の人物像を豊かにすることで支援へ繋げるよう取組みに期待したい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	分かる範囲で入居者の一人一人のバックグラウンドを調べる事で、これまでの経過を把握する事にしている。また日頃の会話で経過バックグラウンドを知りその人らしく暮らせるよう出来る限り努力して支援しているつもりである。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの一日の過ごし方の把握は、個人日誌などで行っている。毎日の様子を元に心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方についてスタッフなどの意見を取り入れている。本人、家族、必要な関係者と話し合いについては、家族の意向は聞く事になっている。	契約時、家族からの情報を基に現状を把握し、アセスメントを行い職員で協議して計画を作成し、個人日誌に実践状況を記録している。日頃から本人・家族の意向を聴取している。更新時は管理者、ケアマネジャー、職員参加のケア会議でカンファレンスを行い、医師の意見も反映して介護計画書を作成し、家族に同意を得て実践している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個別に個人日誌などで記録し、スタッフ一人ひとりの入居者への様子や興味などを記入している。介護計画の見直しに活かす事で、介護計画書の見直しに役にたっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人ひとりを支えるための事業所の多機能化については、当ホームは取り組みがまだしていないため、今後の課題となる。		

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとりの暮らしを支え、日々の楽しい生活を送れるよう支援しているが、地域資源を把握してはいない為、当グループホームとして、認知症の入居者へどのような支援が出来るのか？を検討課題としている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	5年前頃より、理想とする在宅医療として医療連携が成立した。「2人の掛かり付け医師の支援」をその後も受け続けている。常に柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組む様に努力している。今も定期的にかかりつけ医の2名と、精神科医師、皮膚科の医師が、ホームへ定期的に診療に来訪されている為、適切な医療を受けられるように支援されている。かかりつけ医師は、入居者の健康状態を把握している為、急変時などは、24時間かかりつけ医師に報告する事の連携がある為にスタッフも安心して相談できる体制になっている。また、協力病院に依頼など、適切な医療を受けられるように、自慢出来るホームではなが、この医療医師との関係は万全な体制で入居者への支援を行なっている。	2人の利用者はこれまでのかかりつけ医を受診している。事業所は、長崎市内のDr. ネットに加入している2ヶ所の医療機関と連携しており、往診がある。従来のかかりつけ医は迅速な対応を得られなかったが、Dr. ネットの医療機関は対応が迅速であり、利用者の異常や急変にも職員の心強い後ろ盾となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療加算の手続きはしていない。かかりつけの医師がその代わりにされている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	2人のかかりつけ医が2名ホームへ、常に定期的に診療に来訪されている為、緊急の際には適切な医療を受けられるように支援される様に、病院関係との連絡がスムーズに行われている。また協力病院や長崎の医療設備の整った病院への入院で適切な医療を受けられるよう、2名のかかりつけの医師と病院との医師連携関係で、万全な体制で入居者への支援を行なっている。		



グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所までできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行う事を、行う様になっている。看取りに関して契約書に明記し、家族に同意書もいただき、職員にもホームの方針を説明している。また身寄りがない入居者に関しては、事業所として開設者である江口孝則総括施設長の考え方として「人がいずれ死と向かう事として、その最期を出来る限り我々は、人として、誠意を当然のごとく行うことを当ホームでの基本理念」としている。無縁の方が年間に数名、死去されているが、ホームの会議室に仏壇を設置し、定期的に住職より読経をいただいている。平成12年4月1日開設から15年間の歴史でもホーム入居者がグループホームとは最期までの介護が当然であるべきであるとしている。	契約時に契約書に基づき、看取りの説明を行い、同意書を得ている。身寄りのない利用者には安心するよう最期まで支援する旨を伝えている。Dr. ネットとの連携により、24時間体制での看取り支援が出来るため、職員は主治医の指示を仰ぎ支援に努めている。亡くなった後には通夜、葬式を行い、仏壇に納め毎日線香をあげている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	月2回、入居者緊急事態の対応法を訓練し、初期対応がスムーズに行えるよう常に訓練している。車いす車への、対応も月初めに訓練し、事故が無い様に務めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	当ホームはスプリンクラーを設置していない為に、火災が起きると大事故になる事を想定し、肩身の狭い心境であったが今年27年に簡易スプリンクラーとも建築物の防火建築物への改修を、関係所管と銀行より借入し、完成となった。ただ火災が発生した時の、初期消火が重要であり、そのために職員に火災訓練と入居者の避難訓練の方法を徹底させる為、実際に、火災想定し、実際に火災通報ボタンを押す。という、訓練をしている。過去のグループホームの火災では、通報ボタンを押せない事で、消防車の消火が遅れたとの事であり、事前に消防署に連絡して、火災通報ボタンを押す訓練を、必ず実施している。また特別訓練として、1ヶ月に一回は夜間訓練、日中火災訓練を実践している。現在でも、夜間の想定訓練を日中にするのではなく、実際に夜間に、夜勤スタッフが行なう訓練を他のスタッフが見学して、感想と意見書を提出して、次の自分の担当する時に参考にする事をさせている。入居者も訓練には理解し協力的である。施設長以下2名の甲種防火管理者講習を受け、地域の火災・避難訓練や地域の災害訓練に参加し日頃より実技を行っている。また江口総括施設長は旧夕張消防団員でもある。	年2回消防署立会いによる訓練を実施している。簡易スプリンクラーを設置し、年2回業者の点検を受けている。事業所では、1ヶ月に2回夜間と日中想定で避難訓練しており、避難場所は事業所の上部にある空き地となっている。2、3日分の備蓄の検討を始めたところであるが、緊急時の持ち出し品については、未着手である。	検討を始めた備蓄と共に、緊急時に必要な情報をまとめた持ち出し品についても工夫、検討を期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念に基き、スタッフへ新人研修で一人ひとりの人格を尊重し、人としての誇りやプライバシーを損ねない言葉かけに配慮した言葉かけを行う事を社内教育している。	代表と施設長は、職員に対して利用者の尊厳に配慮した言葉掛けや支援に努めるよう日頃から話している。利用者の個人情報や所定の場所に保管しており、職員は雇用契約の際に、守秘義務の誓約書を提出している。ただし、食事の声掛けでは指示命令の口調が確認された。	利用者の尊厳を重視した支援においては、指示命令の口調ではなく、利用者の尊厳に配慮した声掛けを検討することが望まれる。職員間での注意・啓発にも期待したい。

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ、利用者の希望や思いを把握して一人ひとりのペースを大切にしているし、自己決定できるように働きかけている。「わがままが言える」「玉には入居者同士の口喧嘩もある」「自由に言える」のについては、それもありがたい事であるかも知れないと思っている。江口孝則総括施設長等は、家庭内で常に言われている為に、馴れている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の決まりや都合を優先せず、利用者の希望に出来る限りそって支援している。が、身体を動かない事があるため、毎日時間を決めてスタッフと触れ合い活動で変化のある日常の暮らしとしている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者一人ひとりの個性に合わせて、その人らしくおしゃれが出来るよう取り組んでいる。散髪やオメこも、スタッフが染めている。衣服も化粧品も個人の意志を尊重して自由にしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事が楽しみなものになるよう好みなどを取り入れ、栄養バランスにも気を使っている。が入居者の希望より、スタッフの食べたい希望を取り入れる為、スタッフが食べ過ぎる傾向になり、年々****の様になりつつある。一週間に2日は利用者と職員と一緒に食事作りをしている。	リビングと調理する場所は隣接していて、調理風景や匂いで五感を刺激し、利用者自らが調理参加しやすい環境にある。利用者は皮むきや配膳等、役割を持ち行動している。おやつ、行事食も手作りで、利用者と職員が同じテーブルを囲んでの食事風景である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量や栄養バランス、水分量、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をし、個人に応じた食事量と1日の水分量などを日々の記録に明記している。一年中、生野菜だけは摂取が基本としている。料理は技量もあるが、「味において」はまだまだ努力が必要と思われる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	基本的にご誤の恐れもあるために、夜食後に口腔ケアは行う。また本人の力に応じ口腔内の清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定期的時間的にでなく、一人ひとりの排泄パターンを把握し、支援する事により、一人一人の失禁を出来る限り少なくなるよう支援している。	トイレは3ヶ所あり、全員がトイレで排泄しており、職員は排泄後に確認し支援している。自立している利用者もいる。排泄パターンで1日の流れを把握し、早めの声掛けで失禁を防いだり、紙パンツの使用を減らすよう努めている。夜間、ふらつきがある利用者は、紙おむつを利用している。	

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的にホーム内でのレクリエーションで、無理のない体操などの運動を行い、便秘予防に努めている。毎日便の状態を詳しく(色、堅い柔らかい?回数)排尿も色、回数の確認をしている。便秘の理由も原因等をスタッフのミーティング出報告などをして、一人一人の様子を把握することに、指示をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は月水金の週3回としているが、状況に応じて入浴出来ない者へは「足湯」を行っているが、足湯の設置をする事になってから数年たつが、足湯が入居者の楽しみになっている為、今日は毎日入居者は足湯をしている。入浴は一人ひとりの希望に沿った湯温度に設定している。	冬場は週2回、夏場は週3回の入浴を支援している。拒否があったり、入るタイミングが難しい利用者にも声掛けし、清潔保持に努めている。順番表で入る順番に偏りがないように工夫している。湯温計で調節し、利用者の好みの湯温に対応している。入浴日以外の日は、足浴が利用者の楽しみとなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自由な生活が出来る事が当ホームの特徴であるため、休憩したり安心して休まれるよう一人ひとりにあった生活環境を最善の提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎食後内服薬の確認をし、副作用などの変化に注意し用法などの理解をしている。ミーティングで説明等をしている。間違った服薬がスタッフにも無い様にと、入居者の薬を一人一人分かりやすくしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の会話の中から趣味や生活歴を、なにげなく聞き出し、その過去を思いだしたりした、生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、の会話等で、楽しみごとにつながるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節によっては、散歩などを行い季節の行事を企画し、花見などを行事の中に取り入れ外出の機会を多くしている。入居者も高齢になり夏に外出支援の為屋外に出掛けたが、熱中症の症状が出た為、控えた事もある。町内の盆踊りに入居者と共に出掛ける等は行なっている。比較的元気な入居者では、食材買い出しの手伝いなど、本人の希望でしている事を、自立する意味で、支援している。家族が外出する要請にも、すべて支援している。	桜の花見や凧揚げなど季節の行事を計画し、天気の良い冬場には、日当たりのよい廊下に集まり日光浴を楽しんでいる。帰宅願望のある利用者には、車の往来が少ない時間帯に近隣を散歩している。洗濯物の干し入れで外気に触れたり、職員の買い出しに同行する等、気分転換を図っている。家族と外食に出掛ける利用者もいる。	

グループホーム 坂の上の紫陽花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	以前は一人ひとりに応じた金銭管理をしていたがお金の使用時の支援をしている事は、現在は行っていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者によっては、電話など自由に利用している。手紙については受け取りや投函が自由であり、投函困難の方はスタッフのほうで投函している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように常に配慮している。リビングなど、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ガラス窓から見える畑や木々で、季節の移ろいを感じることができる。リビングには、利用者の顔写真や季節の貼り絵や習字作品を飾っている。また、リビングは利用者と職員がレクリエーションや調理準備をする大切な触れ合いの場所である。掃除は職員が清掃し、週に数回の契約社員による清掃で清潔を保持している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	民家を改築して家庭的な雰囲気の中で生活していただけるよう支援している。気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。入居者同士のトラブルも無い。一人になりたい時は自由に居室へ戻ることへの理解をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族と相談しながら、使い慣れた家具などを持ち込んでもらい、居心地よく過ごしてもらえよう工夫している。何が駄目は「火の始末」だけで、その他はすべて使い慣れた物の持ち込みは了解している。	和室と洋室があり、従来の使い慣れた物を持ち込むことができる。仏壇やタンスを配置し、利用者によっては賞状を飾っている。加湿器で湿度を保つ等、利用者が居室で快適に過ごせるよう配慮している。掃除は、基本的に職員が行い、利用者によっては職員と一緒に掃除することもある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全性を考えながら、出来る限り、入居者にとって「分かりやすい事をも目的とした表示」を付けたりして、一人ひとりに合った生活環境を整えている。		